

## 25. ケヤマウコギ *Eleutherococcus divaricatus* (ウコギ科)

【生育地】 山地の林内や林縁。北海道、本州、四国、九州に分布。

【樹形】 落葉低木

【樹皮】 灰褐色。細かい縦のしわや皮目が多い。若い枝には毛がある。太い刺が散生する。

【冬芽】 枝とほぼ同色で互生。芽鱗は5～6枚。葉痕はU字形。維管束痕は7～9個。

【葉】 5枚の小葉からなる掌状複葉で互生。小葉は長楕円形で頂小葉が大きい。長枝にはまばらにつき、短枝には多数集まってつく。葉質はやや厚く、縁に細かい重鋸歯がある。表面は緑色凹状、裏面は淡緑色。全体に毛が多く、特に葉裏の葉脈、葉柄に密に毛がある。葉柄は長い(4～10cm)。

【花】 8～9月。雌雄同株。緑白色～紫褐色。当年の枝の先に直径2cmの球形の散形花序をつける。花弁5枚、雄しべ5本、花柱は浅く2裂。葯は黄色。

【果実】 形は6～8mm、扁平な楕円形。種は2個入り、表面に密に毛があり、黒く熟す。

【所見】 花期(春5～6月、秋8～9月)の違いや、葉の凹状、毛の有無等で同定ができる。菅平高原実験所では観察道アカマツ林入口に幼木が、また、草原のメタセコイア林の奥に成木が見られる。

【類似種との見分け方】 ヤマウコギは、開花時期(初夏)、花の付ける位置(短枝)、無毛などから見分けられる。

【調べたこと】 和名はヤマウコギより花序、枝、葉に毛が多いことからである。若芽は食用。

【参考文献】 花実でわかる樹木(信濃毎日新聞社)、葉でわかる樹木(信濃毎日新聞社)、牧野新日本植物図鑑(北隆館)、樹皮と冬芽(誠文堂新光社)

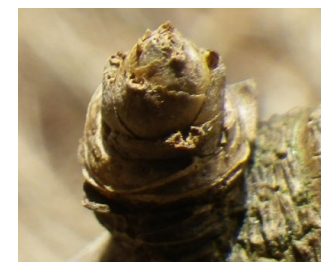
<小山田 八重子>



成木 (2017.5.20)



老木 (2017.11.16)



冬芽 (2017.4.19)



維管束痕 (2017.10.19)



葉 (2017.6.30)



葉裏基部 (2017.8.19)



果実 (2017.10.17 菅平湿原)



種子 (2017.10.17)



花 (2017.9.11 菅平湿原)



花 (2017.9.11 菅平湿原)

## 26. クロウメモドキ *Rhamnus japonica* (クロウメモドキ科)

【生育地】 山地に生える。湿った場所を好む。本州、四国、九州の山地帯に自生する。

【樹形】 落葉低木～小高木。先端部に刺がある。

【樹皮】 光沢があり灰色で滑らかな感じで、桜に似ている。老木は凹凸が増えなめらかさが減る程度で目立った違いは無い。

【冬芽】 対生またはやや対生し、卵型で先端はとがり、薄茶色でやや光沢がある。6枚の芽鱗につつまれる。

【葉】 単葉で長枝に対生またはやや対生し短枝に束生する。低く細かい鋸歯。

●形 2～7 cm、倒卵形または倒皮針形 ●葉柄 0.5～2 cm

●葉脈 側脈3～4対 ●毛 表：短毛少し散生、裏：脈腋に少しあり

【花】 雌雄異株。4～5月に開花する。枝の基部近くに花をつける。

●花卉 4枚、雄花と雌花がある。短枝の葉痕の下から花柄を出していく、図鑑では開花すると☆のような形になるようだ。黄緑色の小さな花で目立たない

【果実】 短枝葉痕下から花柄を伸ばし先端につける。ほぼ球形の核果。緑から黒へと色が変わっていく。葉が落ちても果実がついていて目立つ。

【所見】 菅平高原実験所には樹木園と、アカマツ林入口付近にあり数が少ない。菅平湿原でも見られる。

【類似種との見分け方】 クロツバラは、葉が長楕円形でクロウメモドキより葉が大きめ、形も明らかな違いがある。クロツバラの木は菅平高原実験所には見られない。

【調べたこと】

- ・一年間で2 cm くらいの伸びのようだ。
- ・トゲ状になった枝の先端の部分からは伸びない。
- ・やや山地性のスジボソヤマキチョウの幼虫の食樹である。スジボソヤマキチョウはクロツバラも食べるが、ヤマキチョウはクロツバラしか食べない。

【参考文献】 日本の樹木（山と溪谷社）、花実でわかる樹木（信濃毎日新聞社）、葉でわかる樹木（信濃毎日新聞社）、冬芽でわかる樹木（信濃毎日新聞社）

<松崎 務>



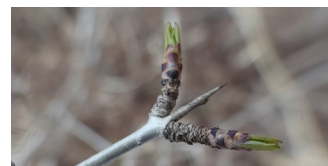
樹皮 (2017.5.17)



裏面



鋸歯



枝の先端は尖る (2018.4.14)



短枝 (2017.5.13)



花 (2020.6.2 撮影/山中)



結実 (2017.6.14)



果実 (2017.9.27)



果実 (2017.10.14)

## 27. ツルウメモドキ *Celastrus orbiculatus* (ニシキギ科)

【生育地】 山地や路傍の林縁などに多く、普通にみられる。北海道、本州、四国、九州、沖縄の山野に自生。

【樹形】 落葉つる性木本、老木は深く縦に割れすじがある。つるは前年の伸びた枝の頂芽から伸び、右巻きでまきつく。また、冬芽で花序を持たなかった葉の葉腋からも出て伸びる(写真A)。

【樹皮】 枝は平滑で無毛、今年の枝は赤褐色、古い枝は灰色。

【冬芽】 冬芽は互生し球形または円錐形で先端はやや尖がり芽鱗6～10枚につつまれ、長さ2～4mm。葉痕は半円錐形、髄はやや太い。

【葉】 柄があり互生、1つの側枝に楕円形の葉、下の葉が小さく、だんだん大きな葉となり5～8枚つける。

●形 長さ5～12cmくらいの楕円形、幅4～8cm、先端は円頭、基部は円形やしくさび形、軽く波打つ

●葉柄 1.5～3cm、無毛 ●葉縁 浅い不揃いの波状の鋸歯

●葉脈 網状脈、側脈約5互生、側脈は縁近く細分する ●毛 表裏は無毛

【花】 6月、葉柄の付け根(葉腋)、頂生から花序を出し(1～1.5mm)花柄1～5個の蕾を付けて萼平では6月半ばに咲く。雌雄異株。

●雌花 淡緑色、長さ1mmのがく5枚、長さ2.5mmの花弁5枚、花柱長さ3mm、柱頭は3裂、退化雄しべ5本、長さ1mm

●雄花 淡緑色、長さ1.5mmのがく5枚、長さ4mmの花弁5枚、雄しべ2～3mm。咲き終わると落ちてしまう

【果実】 生長する中で葉腋につけた実を落とし、3～0個になった。10月、蒴果は球形、径7～8mm黄熟、3枚のからに裂けると黄赤の仮種皮があらわれる。からは固く、3方にわかれて開き、仮種皮の種子を乗せたようになる。柔らかい仮種皮をとると1室に1～2個ずつ(3～6)茶色の種子をつくる。

【用途】 黄赤の仮種皮が出た枝を生け花やリースなどに使う。菅平高原実験所では、実習棟の北側、赤松林入口の観察道で見られる。

【調べてわかったこと】 托葉は草落性、褐色、長さ2～3mm、糸状に細裂する。幹の直径が20cmになるものもある。

【類似種との見分け方】 キミツルウメモドキは、仮種皮が黄色。イヌツルウメモドキ(オニツルウメモドキ)は、葉の裏面葉脈上に突起がある。

【参考文献】 日本の野生植物(平凡社)、冬芽でわかる落葉樹(信濃毎日新聞社)、牧野新日本植物図鑑(北隆館)

<藪原 稔子>



老木 (2018.4.14)



冬芽と落葉痕 (2017.12.9)



芽吹き (2018.5.12)



膨らんできた冬芽 (2018.5.12)



(写真A) 葉腋からも伸びる (2017.7.8)



葉のつき方 (2017.7.8)



雌花 (2018.6.14)



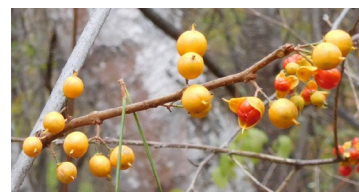
雄花 (2018.6.14  
小諸市塩野)



若い果実 (2017.7.8)



色づき始め (2017.10.11)



果実 (2017.10.28)



仮種子の種子 (2018.11.10)



からと種子 (2018.1.17)

## 28. タラノキ *Aralia elata* (ウコギ科)

【生育地】 日当たりの良い山野の林縁や崩壊地。日本各地、東アジアに分布。

【樹形】 落葉小高木（2～5 m）。あまり枝分かれしない。幹が直立し、枝葉が先端に集中し四方に伸びる。

【樹皮】 灰褐色。幹に垂直に伸びる大小の刺や葉痕が目立つ。細い幹（若木）は特に刺が多い。太い幹は縦に裂け目が入っている。

【冬芽】 頂芽は円錐形で大きい。側芽は小さく互生。芽鱗は3～4枚。葉痕はU字形、多数の維管束痕がある。

【葉】 奇数2回羽状複葉。互生。小葉は卵形で先端は鋭く尖る。表面は濃緑色で毛が散生し葉脈上に多い。裏面は緑色で葉脈上にある。草質でつやがなく、縁に粗い鋸歯がある。基部は円形で、軸、柄に刺がある。

【花】 8～9月。雌雄同株。緑白色。茎の先端に散形花序を複総状につける。花弁5枚、雄しべ5本、雌しべ1本。木を覆うように咲く。花序全体に毛がある。

【果実】 形は3 mm くらいの球形。10月黒く熟す。花柄が赤くなる。

【所見】 大きい花序に多数咲く花は目立つ。木全体に刺と毛がある。観察道アカマツ林の中に見られるが、花をつける木は少ない。

【類似種との見分け方】 メダラには茎、葉に刺がない。

【調べたこと】 新芽は食用でタンパク質、脂肪が多く含まれる。樹皮、根皮は生薬として用いられ、健胃、滋養強壮に効能がある。頂芽のみが採集の対象だが、側芽をとるとその枝は枯れる。

【参考文献】 花実でわかる樹木（信濃毎日新聞社）、葉でわかる樹木（信濃毎日新聞社）、牧野新日本植物図鑑（北隆館）、樹皮と冬芽（誠文堂新光社）

<小山田 八重子>



成木 (2017.5.17)



頂芽 (2017.4.29)



樹形 (2017.5.24)



若木 (2017.5.21)



維管束痕 (2017.4.29)



花 (2017.8.19)



花 (2017.8.19)



葉 (2017.5.17)



葉裏 (2017.5.17)



結実 (2017.9.8)



果実 (2017.9.8)

## 29. ヤマウルシ *Toxicodendron trichocarpum* (ウルシ科)

【生育地】 山地や低地丘陵。日本各地に分布する。

【樹形】 落葉低木、高さ3～8mくらいになる。

【樹皮】 灰白色で褐色の縦筋がある。若い枝は円形から楕円形の皮目がある。

【冬芽】 裸芽で褐色の細毛が密生する。葉痕はハート型で、維管束痕が多い。

【葉】 奇数羽状複葉、互生。あまり枝分かれせず茎や枝先にまとまって葉を広げる。小葉は6～10対で卵型または卵状長楕円形、成木は全縁か1～2個の歯牙がある。幼木の葉には鋸歯がある。葉の表面は毛が散生、裏面脈上に軟毛が密生する。葉先は鋭くとがる。葉柄・葉軸ともに赤みがかっていて、軟毛が密生する。

【花】 雌雄異株。5～6月、黄緑色の小花を円錐状に咲かせる。花序は腋生。萼片・花弁とも5個。花序軸に毛がある。雄花の花弁は反り返り、葯は花の外に突き出す。雌花の子房には刺毛が密生、花柱は花の外に突き出し、柱頭は3裂する。

【果実】 核果。直径5～6mmの扁球形。9～10月、黄褐色に熟す。外果皮は薄く、刺毛が生えはがれやすい。外果皮がはがれると縦筋のある白いうろ質の中果皮が露出する。

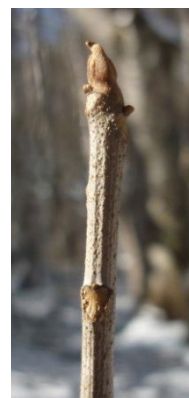
【備考】 名前の由来は、漆をとるために植えられるウルシに似ていて、山に生えるので。漆液も採れるが量は少ない。樹液に触れるとかぶれる。秋は早めに赤や黄色に紅葉する。

【参考文献】 樹に咲く花（山と溪谷社）、牧野新日本植物図鑑（北隆館）

＜高根 順子＞



雌花序（開田高原）



冬芽（2017.12.9）



葉痕（2017.4.29）



樹形（2017.6.17）



幼木（2018.5.31 塩尻市）



結実（2018.7.14）



雄花序（2018.6.21）



果実（2019.9.14）

### 30. ミヤマイボタ *Ligustrum tschonoskii* (モクセイ科)

【生育地】 山地、長野県では標高 1000 m 付近がイボタノキとミヤマイボタの境界。北海道、本州、四国、九州、サハリン。

【樹形】 落葉低木、高さ 1～3 m、短枝がよく発達する。

【樹皮】 灰色

【冬芽】 茶褐色に黄緑色や薄茶色が混じる、芽鱗 3～4 対、卵形で先は尖る、葉痕は半円形。

【葉】 単葉、対生。

●形 長さ 2～5 cm、幅 1～2 cm、卵形長楕円形。先は尖り、基部はくさび型（イボタノキの葉先は丸みがある）

●葉柄 2～5 mm ●葉縁 全縁

●毛 光沢が無く、表面は無毛、裏面の毛の量は変化が多い。

【枝】 短枝がよく発達する。ほとんど無毛だが、若枝に短毛がある（イボタノキは若枝に毛がある）。

【花】 両性花、6～7月、新枝の先にかたまって白い花を付ける。2～4 cm の円錐花序である。

●花冠 長さ 6～7 mm、筒状漏斗形で先は 4 裂する

●雄しべ おしべは 2 個、花筒から突き出る

【果実】 直径 7～8 mm の球形。始め緑色だが、10～11 月に紫黒色に熟す。

【所見】 良く発達した短枝、全縁の対生の葉などで判別できる。菅平高原実験所内では、大明神寮脇に大きな株があり、樹幹全体にたくさんの花を付ける。

【類似種との見分け方】 イボタノキは葉の先が丸く、ミヤマイボタは尖りぎみである。ミヤマイボタはイボタノキより標高が高い場所に生え、長野県では標高 1000 m から 2000 m 付近に見られる。

【調べたこと】 イボタノキなどにつくカタカイガラムシ科の昆虫は、イボタロウムシと呼ばれ白い蠟を分泌する。その蠟はイボタロウと呼ばれ、止血、強壮、家具の艶出しなどに使われている。菅平高原実験所のミヤマイボタにイボタロウムシは観察できていない。

【参考文献】 樹に咲く花（山と溪谷社）、冬芽ハンドブック（文一総合出版）

< 岩下伸也 >



樹皮 (2017.9.9)



冬芽 (2017.12.9)



落葉痕 (2017.10.28)



葉 (2017.6.17)



葉の先は尖る (2017.8.19)



花は円錐花序 (2017.7.8)



果実 (2017.12.9)

## 31. アズキナシ *Aria alnifolia* (バラ科)

【別名】 ハカリノメ

【生育地】 低山から山地の乾燥した尾根筋や崩落地。北海道から九州の広い範囲に自生。朝鮮半島、中国にも分布。

【樹形】 落葉高木

【樹皮】 灰黒褐色でざらつきがあり、老木では縦の細長い裂け目が入る。

【冬芽】 無毛の赤褐色、長卵形で先端が尖る。4～6枚の芽鱗に包まれている。

【葉】 短枝の先は3～5枚葉。長枝は互生。

●形 5～8cmの卵状楕円形。先端が鋭く尖る ●葉柄 1～2cmあり赤みを帯びる

●葉縁 重鋸歯 ●毛 表面も裏面も無毛

●葉脈 8～12対の明瞭な側脈があり、葉の裏側に突出している。側脈は等間隔になっていてほぼ直線状に斜上し縁に達する。

【花】 5月～6月、葉の展開とともにつぼみを出す。短枝の先に白色の直径13～16mmの花5～20個からなる複散房花序をつける。

●雄しべ 20本、基部が合着して花盤を形成 ●萼 萼片は2～3mm

●雌しべ 2本あり淡緑色。先端は広がり平ら ●花柄 1～1.5cm

【果実】 秋にくすんだ赤色のあずきほどの実をつける。

【所見】 菅平高原実験所ではアカマツ林入口より10mくらいの左手と大明神の滝に下り始める右手の2本を観察。日が当たらないせいか花の数は極端に少ない。四阿山の登山道入り口にはアズキナシが沢山あり花の数も多い。

【類似種との見分け方】 アズキナシの葉は表も裏も同じ色。ウラジロの葉の表はアズキナシに似るが葉の裏は白い。

【調べたこと】 アズキナシの名前の由来は、秋にあずきほどの赤い実をつけ、実の中が梨と同じ石細胞持つことから／別名「ハカリノメ」は、葉の側脈が等間隔になっていて秤の目に見えることから。

【参考文献】 庭木図鑑 植木ペディア (<https://www.uekipedia.jp/>)、くらべてわかる木の葉っぱ (山と溪谷社)、冬芽ハンドブック (文一総合出版)

＜北澤 佐代子＞



果実 (2018.10.10 四阿山登山口)



樹皮 (2017.4.29)



冬芽 (2021.1.16)



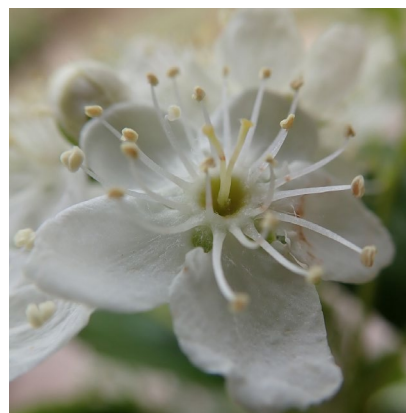
つぼみ (2018.5.24)



樹形 (2018.5.7)



葉 (2018.5.12)



花 (2018.5.7 東御市)



花 (2018.5.7 東御市)

## 32. ハンショウヅル *Clematis japonica* (キンポウゲ科)

【生育地】 山地の林縁、本州～九州

【樹形】 木質のつる植物で落葉性低木（草本とする場合もある）

【樹皮】 若い茎は暗紫色を帯び細毛が密生。木質化すると灰白色で皮目が目立つ。

【冬芽】



冬芽 (2017.12.9)



冬芽の展開 (2017.5.1)

【葉】 葉は3出複葉で対生。小葉は4～9 cm の卵形で先は尖り粗い鋸歯がある。

【花】 花柄は6～12cm で先端に紅紫色の花を下向きにつける。花弁はない。花弁のように見えるのは萼。

【果実】 瘦果の花柱は先が尖り3 cm ほどにのびる。毛ものびて羽毛状になる。瘦化は約6 mm。翌年1～2月まで見られる。

【調べたこと】 ハンショウヅルの半鐘は、火の見櫓の塔上に吊り下げられた小型の釣鐘。

【参考文献】 野草図鑑 ([https://www.kagiken.co.jp/new/db\\_yasou.html](https://www.kagiken.co.jp/new/db_yasou.html))、松江の花図鑑 (<https://matsue-hana.com/>)

<松倉 実>



樹皮 (2018.1.28)



葉は3主脈が目立つ (2017.5.1)



長い葉柄が他の木にからみつく (2018.5.12)



花。4枚の萼からなる (2016.6.8)



萼片が落ちる (2017.7.8)



果実 (2017.7.8)



羽毛状の花柱と瘦果 (2018.1.28)